

## 復曲能〈星〉の再考・新演出について

田村良平\* (村上 湛)

二〇一七年（平成二十九年）二月四日、大阪・大槻能楽堂における「第六二四回／大槻能楽堂八十周年記念特別公演・観世小次郎信光没後五百年記念」において番外曲〈星〉が復興上演された。現存記録を調べる限り、初演当日以来ほぼ五百年ぶりのことである。私は公益財団法人大槻能楽堂理事長であり後シテ・軍神を勤めた大槻文藏氏（前年にいわゆる「人間国宝」に認定された）より委嘱を受け、型附（演技手順書）の作成ほか演出全般を担当した。

当日、能の上演に先立って、今回の能本作製を担当された天野文雄氏と私との間で「信光と信光以前」と題する対談を舞台上で行なった。天野氏は席上、『能本作者註文』に〈星〉を信光作としている点を重視され、上演記録と制作年代が多少ズレるといふ問題はあるにせよ、本作を「観世信光の作もしくは改作とも考えて良いだろう」と結論せられた。今回の復曲の発案者たる大槻氏が意図するところを以前、私に語られたことがあるが、その折「童子に化身した星の精（今回の前シテ）が人の

運命を司る面白さ」に着目された如く、本命星の守護によって漢・高祖が楚・項羽に勝利するドラマのスケールは巨大だ。この劇的世界観の巨大さは先行する世阿弥・禅竹・元雅らの作品には見られない、信光独自の個性といえる。

能楽史上、能〈星〉の存在意義は色々な意味で重い。信光が得意とした多人数によるスペクタクルという点に加え、世阿弥時代には低調で類例を見なかった「唐事の能」の流行に一転機を画した作品かもしれない。天野氏は当日配布のプログラムにこう書かれた。「本曲は高祖の本命星が高祖に助力した結果、秦に代わって漢の世になったことを描くが、『太平記』『神皇正統記』によれば、わが国では天皇の本命星が国家鎮護の神として比叡山東塔の総持院に祀られていた。それをふまえるならば、作者には本命星の加護による高祖の勝利をおして、わが国の安泰を祈念する意図があったと思われる」。首肯せられる考えと思う。

詳細は後掲するとして、はじめに舞台の概略を記すと以下のような

前場。ワキツレ・韓信（福王和幸）が同・紀信（福王知登）を呼び出し、高祖に本命星の祭祀を進言しようと談合するところに、童子姿の前シテ・本命星の精（大槻裕一）が現われ守護を確約して消える。ワキツレ二人は「早鼓」で退場する。

入れ替わりに間狂言・高祖の下人（善竹隆平）が登場し、状況説明の立ちシャベリがある（内容は後述のようにほぼ新規に執筆）。

後場。後見が一畳台三枚を持ち出し、陣段に見立てて地謡前に積む（喜多流〈石橋〉の小書「三ツ台」から採った）。「一声」でワキ・高祖（福王茂十郎）および漢軍五名（シテ方立衆）が舞台に出る。続いて短

い「早笛」でワキ・項羽（森常好）と楚軍五名（シテ方立衆）が橋掛りに出て対峙。「カケリ」の斬り組ミで高祖以外の漢軍全員が順次斬り倒され切戸口から引き、項羽と楚軍が橋掛りから舞台上に乱入すると、後見は（鉄輪）から流用した祈禱棚を三ツ台の前に据え、高祖は台頂に坐して棚上「三尺の剣」を取って構え、「ノット」で祈禱の謡。続いて地謡の内に後ツレ・眷属二神（長山耕三・齋藤信輔）を随えた後シテ・軍神（大槻文藏）が出、「立廻り」の間に三神が三ツ台に上がると、眷属の一撃に楚軍は壊滅した態で立衆五名はズカリ安坐して切戸口に引く。続く「舞働」で項羽は眷属二神をいったん橋掛りに退けて優勢を誇るものの、結局のところ軍神の鉾に身を貫かれて落命、切戸口に引く。その鉾を軍神から授けられた高祖は、橋掛りに並んだ軍神と眷属の三神を礼拝し終曲。上演時間約六〇分であった。

前後で入れ替わりがあるにせよ、登場人物（立方）は延べ十九人。後場で同時に出て演技するシテ方・ワキ方の最多人数は十二名で、激しい斬り組ミを伴うだけに役者のさばきように熟慮を要した。高祖の福王茂十郎、項羽の森常好、現在のワキ方で最も存在感を発揮するお二人の配役は、この企画の初案当初から私が是非にと願って実現したものである。面を掛けることのないワキ方、しかも古来名高い漢祖軍談の両巨頭である。優れた「面構え」を誇るお二人の出演を得て、この復曲に最高度の重みが加わった。ワキ方福王流と同下掛宝生流の異流競演は能楽史上初めてのことであり、また、細かなことだが、ワキが「早笛」の囃子で舞台上に登場する試みも類例のない初めてのことである。

手前味噌ながら、結果的に整理が行き届き、能舞台の構造と能の演技

様式を活かし得た好演だったと思う。橋掛りの長い国立能楽堂あたりで再演の機会が得られれば効果もより勝り、斯道のために益するところも大きいだろうと思う。

【二〇一七年（平成二十九年）二月四日（土）午後二時開演】

大槻能楽堂八十周年記念特別公演・観世小次郎信光没後五百年記念

復曲能〈星〉

前シテ（童子実は本命星の精） 大槻裕一

後シテ（軍神） 大槻文藏

ワキ（高祖） 福王茂十郎

ワキ（項羽） 森常好

ワキツレ（韓信） 福王和幸

ワキツレ（紀信） 福王知登

後ツレ（軍神の眷属） 長山耕三／齋藤信輔

後場立衆（漢軍の兵） 今村哲朗／上野朝彦／笠田祐樹／浦田親良／寺澤拓海

後場立衆（楚軍の兵） 井戸良祐／上野雄介／山田薫／上田顕崇／山本麗晃

間狂言（高祖の下人） 善竹隆平

囃子（笛）藤田六郎兵衛／（小鼓）清水皓祐／（大鼓）山本哲也／（太鼓）前川光範

後見 赤松禎友／竹富康之

後見 赤松禎友／竹富康之

地謡 上田拓司(地頭)／浦田保親／吉井基晴／寺澤幸祐／味方團／

林本大／水田雄晤／竹富晶太郎

能本作成 天野文雄／演出 村上湛／節付・監修 大槻文藏

※当日は復曲能〈星〉に先立ち、やはり信光の作による能〈胡蝶物着・協留〉が上演された(シテ・観世喜正)。

### 復曲能〈星〉演出概略

#### 【扮装】

※「漢」火徳の王朝」との考えから、後場の漢軍は緋色の装束で揃えた。

※後場の装束は、本来ならば法被より格の高い狩衣をシテに用いるべきところ、「王」たる役位から両ワキにそれを譲り、試みに後シテは法被肩上とした。

※後場立衆のカブリ物は、大槻文藏氏の着想によって、ワキ方の用いる「ゲカン(下冠)」の纓を取った冠本体の如きものを新作して用いた。

※後シテは「軍神」だが、敵軍殲滅の靈験ある「破軍星(剣先星)」の精「靈」の性格を象徴させるため、当日は尖端が剣先となっている「走り天冠」を流用した。

★前シテ(童子実は本命星の精) 面・童子／喝食鬘／摺箔・腰巻／童扇

★後シテ(軍神) 面・大天神／走り天冠または剣先立輪冠・黒頭／厚板・法被肩上・半切・神扇・鉾

★後ワキ(高祖) 直面／唐冠／赤地狩衣・厚板・半切／唐団扇・剣

★後ワキ(項羽) 直面／輪藏帽子／萌黄地狩衣(衣紋)・厚板・半切・

負修羅扇・拔身劍

★前ツレ(韓信・紀信) 直面／單法被・厚板・白大口／男扇

★後ツレ(軍神の眷属・二人) 面・大飛出／赤頭／厚板・法被・半切／打杖

★立衆(漢楚の両軍・後場にそれぞれ五人ずつ) 直面／冠・厚板・白大口(立頭は側次)／拔身劍・弓矢・鉾(以上、演出により適宜選択)

#### ★間狂言(高祖の下人)／官人出立・杖

#### 【作り物】

①陣段＝一畳台三枚(後場に出す。地謡前、品の字型に積む)

②祈禱棚(後場に出す。鉄輪)と同じだが、紅ボウジと紅緞で飾り、上段には『史記』以来名高い「三尺の劍」を示す拔身劍を載せる。下段は高祖が唐団扇を仮に置いたため空けておく)

#### 【演出と舞台展開】

※ここに掲載した謡曲本文は演出上細部に私意の改訂を施したもので、当日の上演本文とは多少異なる。

#### ◆韓信は常座で名ノリ。

#### 【名ノリ笛】

#### 《名ノリ》

韓信／かやうに候者は、漢の高祖に仕へ申す韓信と申す者にて候。さて頼み奉る劉邦殿は、秦の世を討ち取り、天下を治め給ふ處に。楚の項羽これも同じく秦の始皇の都に攻め入り。我が世を持たんと争ふにより、戦ひすでに七十餘度なり。しかれども未だ勝負を決せず。今度の合戦において勝つ事を極め、天下を君に参らせばやと存じ候間、まづまづ紀

信にこの事を談ぜばやと存じ候。

◆韓信、一ノ松へ行き、紀信を呼び出す。

《問答》

韓信／いかに紀信のわたり候か。

◆紀信、三ノ松へ出る。

紀信／誰にて御入り候ぞ。

韓信／某それがしが参りて候。

紀信／や。韓信にてましますぞや。まずまずこなたへ御入り候へ。

◆紀信が先に立ち、入れ替わり韓信が後に続き、舞台に入る。紀信は地謡前、韓信は正中向かって左あたりに相對して下居。

紀信／さて只今は何のための御出でにて候ぞ。

韓信／さん候餘あまのの儀にあらず。このたび數度の戦ひに。互ひに防ぎ戦ふといへども勝つ事を得ず。今度大將本命星を祭り、軍神を勸請し天に祈り給はゞ、かならず利を得給ふべきと思ひ候。御分ごぶんは何とか思ひ給ふぞ。

紀信／仰せの如く某もさやうに存じ候。御身の思し召されんやうを、大將軍へ御申しあれかしと存じ候。

韓信／誠に同心し給はゞ、すなはち高祖に申すべしと。

◆地謡《上歌》「互ひに勇む武士の」(初句) 後の打切で、韓信は正面に、紀信は正先へ向く。

《上歌》

地謡／互ひに勇む武士の、互ひに勇む武士の、心の中の一言も、世におほひたる謀はかりごと、君の為にと思ふこそ、世を治むべき巧みなれ、世を治むべき巧みなれ。

◆良きところで幕上げ、前シテ出る。韓信・紀信、声に気づいて立ち、

紀信は正先と脇座の間あたりに出(韓信はもとの位置で)、二人とも揚幕に向く。

《問答》

童子／なうなう、いかに韓信に申すべき事の候。

韓信／不思議やなわれと紀信とたゞ二人、大事を談じ居たるとは、早くも知ろし召されたり。

◆シテは二ノ松まで出、韓信・紀信に向かい立ち止まる。

童子／今は何をか包むべき。われは高祖の本命星なるが、絶えず守ると思へども、高祖、土神どじんを祭る事おろそかなり。まづ戦場に出でん時、本命星を念じ、軍神を祭り給ふならば、必ず戦に勝つべきなり。されどもこのこと今までは、縁なくしては高祖に告げず。たゞ今二人の君を思ひ、かく言ふ事の嬉しさに、かやうに来たりて申すなり。

◆「あらありがたの」でシテは正面に外す。同時に、韓信は紀信と向き合い、「敵を平らげ」で二人がシテに向くと、シテもまた二人に向く。

韓信・紀信／あらありがたの御事や。さらば高祖にこの事を、告げ知らしめて明日の合戦に、敵を平らげたちまちに、國を治めて武士の。

◆地謡《上歌》「甲にも」(初句) でシテ、韓信・紀信、それぞれ正面に向く。地謡返シで韓信と紀信は向き合い、韓信は紀信に向き一足出てサシコミ、足でヒラきつつ扇を頭上に挙げて倒し、「すぐなる」に当てて扇で右膝打ちざま、身を入れ替えて右足を踏ん込み、右手でサシ、面を切つて紀信をキツと見る。「佛意に」で韓信と紀信がシテを向くと、シテも二人に向きヨセイしてツメ、韓信と紀信はその場でシテに向いたまま平伏。シテは「夕暮の空晴れて」でサシ分ケつつ右にトリ三ノ松へ行き、「夕月の影」で高めにサシコミ、ヒ

ラク、地謡返シで中入。地謡切れると韓信・紀信は居直り、立ち、「早鼓」で中入。

### 《上歌》

地謡／甲にも、戴く星の光まで、戴く星の光まで、曇らぬ君の御心の、すぐなる政。などか佛意にかなはざると、夕暮の空晴れて、隈なき奇瑞あるべしと、夕月の影高く、雲井に入らせ給ひけり。雲井に入らせ給ひけり。

### 〔早鼓〕

◆以下の間狂言は『狂言集成』和泉流三宅派本を参照しつつ、大幅に補筆・改文した。

◆漢楚の軍勢数、人名ほか、『史記』高祖・項羽の両本紀に準拠した。

◆漢字・語句の読み方は、『日本国語大辞典』を参照し、原則として室町時代の音訓に従った（ルビの小字カタカナ「ツ」は促音を示す）。

### 《立チシヤベリ》

下人／かやうに候ふ者は。漢の高祖に仕へ奉る者にて候。たゞ今このところへ罷り出づること餘の儀に非ず。漢の高祖、御名は劉邦。仁にして人を愛し、施しを喜び、常に大度あつて、名望世の常ならず。すなはち知將・猛將あまた幕下に参ずるとは申せども、楚王項羽の勢ひ猛くして、七十餘度の御合戦悉く、御負け給ひて候。しかるに高祖の御許には、蕭何・張良・韓信とて三傑の臣あり。このたび垓下の御合戦に於て、御味方その數三十萬餘騎とは申せども、いつかな項羽十萬餘騎の勢ひ強く、まことに龍虎の争ひの如く、いまだ勝負を決せず候。こたびは君に勝利を得させ奉らんと欲し、韓信は紀信を語らひ、かたじけなくも大將みづから本命星を祭り、軍神を勧請し、天に御祈り給はんことを勧め参らせ

んと、とかく談合仕り候ふところに、なんぼう奇特なることにて候ひつるぞ、星の精靈出現あつてのたまふやう、これまでも絶えず守ると思へども、縁なくしては高祖に告げず。たゞいま二人君を思ひ、かく言ふことの嬉しさに、かやうに來たりて申すなり。まづ戰場に出でん時、われを念じ、軍神を祭り給ふならば、このたびの御合戦には、九曜の星・北斗の七星、なかんづく破軍星の威徳あつて、軍神・眷屬もろともに御力を添へられ、高祖に勝ちを得させ奉り、天下一統、漢の御代を保たせ申さんとの御託宣にて候。かやうの次第と承り、韓信・紀信は申すに及ばず、われらの如き者までも、いさめる心たゞならず。今日は未明より、烏江の原へ打つ立ち候へとの御事なれば、物具甲冑の用意をさをさ、懈怠あるべからず。御勝戦のご加勢仕らうずるにて候ふ間、御旗下の皆々その分、心得候へ、心得候へ。

◆後見が地謡前に三ツ台を積む。「一声」は段を取り、高祖が一ノ松に出、立衆が続く。

### 〔二声〕

### 《サシ》

高祖／天の時は地の利にしかず、地はまた人の和にしかず。邪なる物を従へ、直きを正する政、などかは天も知らざらん。たゞ頼めとよ頼めとよ。

### 《一セイ》

高祖立衆／頼もしや、天の告げある君の御稜威、神も武運の勇みあり。

◆地謡《上歌》「勝つ事を」で高祖は正面に向きサシコミ、ヒラク、据拍子。地謡返シで順次みな舞台に入り（高祖は唐団扇で二つ煽ぎつつ入る）、高祖は三ツ台の手前一段に上がり、真横（脇正面方向）に向き床几に掛かる。立衆は地謡前から流れて立つ（立頭は高祖の

傍、立衆末尾が大鼓前あたり。

### 《上歌》

地謡／勝つ事を、空に知らする星の名の、空に知らする星の名の、破軍星をまもりつゝ馬を速めて大將は、烏江の野邊の閣に上がり、寄せ来る勢をぞ待ちかけたる。

◆「早笛」は段を取りすぐ幕上げ、項羽は三ノ松欄干際まで一気に出てから舞台の高祖に向けキツと面を切り、一度後退して幕内に入り、改めて出て一ノ松で正面に向き立つ。立衆それに続く。項羽《名ノリグリ》「項羽吐する時は臣辟易する勢ひあり」は「早笛」の中に謡い込む。「項羽といへる大將なり」で半身となり片ユウケン二つ。

### 《名ノリグリ》

項羽／項羽吐する時は臣辟易する勢ひあり、遠からん者は音にも聴け、近からん者は目にも見よ、われはその項羽といへる大將なり。

◆「高祖天下を★計らんとす」の「高祖天下を」で項羽は右足を踏ん込み半身となり低く構え舞台脇座の高祖を深く見込む姿勢となり、★に当って高祖に向かい大きく面を切って見据える。「なかか高祖に」で姿勢を直し正面に向く（これまで高祖は項羽に構わず、ずっと脇正面を向いたまま）。

項羽／われ秦の世を取り天下を治めん事、高祖と互ひに約諾せしを、高祖天下を計らんとす。なかか高祖にしかれんものを。

◆地謡《上歌》「いくさその数」で項羽はキツパリと正面へサシコミ、ヒラキ、「積もり来て」（初句）の「来」に当って右拍子一つ強く踏む。「今日ぞ」で項羽は高祖に向き、「つはものを」で立衆に向き直

ってサスト、立衆は裏欄干に寄るようになり、その前を通って項羽は幕際へ行き床几に掛かり（項羽が通過すれば立衆は元の位置に戻る）、後見の世話で扇から拔身剣に持ち替える。

### 《上歌》

地謡／いくさその数積もり来て、いくさその数積もり来て、七十餘度に早なりぬ。今日ぞ勝負を決せん<sup>つちもの</sup>と兵を先に立て高祖の勢に喚きて先をぞ駆けたりける。

◆地謡《ノリ地》冒頭で高祖方立衆は全員が気を揃えて橋掛りに向くと、続いて高祖は幕際の項羽に向く（床几に掛かったまま）。高祖方立衆は「面も振らず」で武器を構えて一気に脇正面に出ると、「項羽のつはもの」で項羽方立衆は左に取って動き、立頭が幕際・項羽の傍、立衆末尾が一ノ松になるよう並び替わり、みな武器を構え一気に欄干際に出ると、「半町ばかりぞ」で高祖方立衆は圧倒された心にて元の位置（地謡前から囃子方前）に下がり、高祖も床几のまま脇正面を外す。

### 《ノリ地》

地謡／もとより高祖の軍兵は、もとより高祖の軍兵は、心に頼む勢ひのいくさ、面も振らず斬り掛ければ、項羽のつはもの乱れ入り、こゝを先途と戦へば、高祖の軍兵斬り立てられて半町ばかりぞ引き退きたる。

◆「カケリ」は適宜、型を考案。高祖方立衆は立頭に至るまで全員が討死の心で一人ずつ切戸口に入り（勝った項羽方は橋掛りに順次戻る）、最後は項羽方立衆全員が橋掛りに立ち並ぶと（立頭が幕際、末尾が一ノ松、囃子の位を速め、項羽は幕際の床几から立って、立衆の前を通って舞台に入り、目付柱の下に正面を向いて立つ。項羽方立衆も立頭を先頭に続けて舞台に入り脇正面に列立すると（立

衆も正面を向く。「カケリ」打上げ、この時に高祖は床几から立つて、三ツ台の手前一段の上から下りず、立ったまま正面に向く。

「カケリ」

◆立衆出入りの邪魔にならぬよう、後見は「カケリ」の位が速まる直前II高祖方立頭が切戸口に入ると入れ替わりに切戸口から祈禱棚を持ち出し三ツ台正面に据え、高祖は三ツ台頂上上がり正面に向き、《ノリ地》「かゝりけるところに」（高祖）と謡い（ここで項羽および立衆は正面を向いたまま下居、祈禱棚に向かい下に居、下棚に唐団扇を置き、上棚の剣を取り上げ、捧げ持ち祈念を籠め、右手に立てて持ち安坐、正先を受けつつ左手で片合掌、《ノット》を謡う。「力を合はせて」で両手に剣を捧げ、正先を受けたまま再拜。「出端」打出シで棚に向き直り剣を上棚に戻し、下棚の唐団扇を取り台上から舞台へ下り、後見が祈禱棚を引くのと入れ替わりに三ツ台中央の前に脇正面を向いて下居。

《ノリ地》

高祖／かゝりけるところに。

地謡／かゝりけるところに、高祖は陣段の上上がり、三尺の剣をするりと抜き持ち、印明を観念し天に向かひ、大音上げて秘文を唱へおはします。

《ノット》

高祖／南無日月星宿三十六天、本命星九曜七星北計天帝釈天、九萬八千の軍神二千八百の軍童子、十二神將四大天王、力を合はせてたび給へ。

◆「出端」一段取って幕上げ、軍神一、シテ、軍神二の順に出て橋掛り良きところに三人立ち並ぶ（シテは二ノ松）。《ノリ地》地謡「旗を差し上げ」でシテは左袖を巻き上げて正面にズカリと出る。

「出端」

《ノリ地》

地謡／不思議や白雲一叢覆ひ、不思議や白雲一叢覆ひ、雷電稻妻虚空に満ち。光の中に軍神現はれ、九曜は九つの眼と現じ、眷属を引き連れ、旗を差し上げ、高祖の陣の上に天下り、吹き来る風も勢ひを取って、敵に向かひおはします。

◆「立廻り」は序付。太鼓頭に合わせてシテは鉾突き拍子を踏み重なる。序打上げをきっかけに項羽と立衆は正面を向いたまま立つ。軍神一、シテ、軍神二の順に舞台に入り、三ツ台の後方から台上上がる（軍神一は脇座前の台上に立ち、シテは三ツ台の頂上で右手に鉾を突いて床几に掛かり、軍神二は嚙子方側の台上に立つ）。三人が上がると嚙子の位を速め、軍神二人が良きところで（太鼓頭を二つあつらえ、その一つ目に合わせると良い）左袖を返して脇正面を見込み右足で強く一つ拍子を踏むと項羽方立衆は一気に安坐（項羽は驚愕の態で左半身となり、左後方の立衆を見込む）、立衆は立頭から切戸口に入る。

「立廻り」

◆地謡《ノリ地》「をめて掛かれば」で項羽は軍神に向かつて剣を構える。「御先を払つて」で軍神二人は台から飛んで降り（入れ替わりに高祖は三ツ台の手前一段に上がり、脇正面を向いて床几に掛かる）、斬り合う態にて項羽と立ちどころ入れ替わり「働」となる。「働」最後は特に位は速めず、軍神二人は二ノ松と三ノ松に流れ、左袖がついて下に居、項羽は一ノ松までこれを追う。この時、高祖は床几から立ち、一ノ松を向く。

### 《ノリ地》

項羽／項羽もさすがに名大将。

地謡／項羽もさすがに名大将の、敵に恐れぬつはものなれば、をめいて掛ければ、軍神の眷属、御先を払つて掛かり給へば、面も合はせず崩れ去って、項羽の前にひれ伏したり。

#### 〔働〕

◆項羽《ノリ地》「項羽馬より下り立ちて」で項羽は一ノ松にて正面を向き、剣を持ったまま下馬の型、舞台に入り（高祖は脇正面を向く）、脇正面でシテに向き、剣を両手で大きく振り上げる。「銚を振り上げ」でシテは床几から立って銚を二つ揮い、「払ひ給へば」で銚を腰の左に構えて項羽に向かい突き出しさま右足で強く拍子を一つ踏むと（左右逆でも可）、項羽は剣を取り落とし流し足を遣って舞台を廻り正中で正面を向き、面を伏せて立つ。これに間に合うよう軍神二人は舞台に入り大小前に並び立ち、背後から項羽を打杖で打ちさま右拍子一つ踏むと、項羽はドツカと安坐し、切戸口に入る。「大将に向かひ」で地謡の位がシマルと、高祖は台上から降りて三ツ台正面に回り、シテより銚を授かり横に捧げ持ち、少し退り、下に居て低頭。シテは雛子方側から台を下り扇を開きつつ、軍神と共に橋掛りに行き（シテは二ノ松、軍神はその左右）、「天下を納むる弓矢の力の」（返シ）でシテは両ウケンして正面に出、右ウケテツメ、トメル（留拍子は踏まず）。高祖は銚を捧げ持つて正面を向いたまま間を計り、脇正面に行き下に居、銚を右脇に横たえ、シテに向き合掌、トメ。

### 《ノリ地》

項羽／項羽馬より下り立ちて。

地謡／項羽馬より下り立ちて、打ち物かざし掛かりけるを、軍神雲より降り下り、銚を振り上げ払ひ給へば、目も昏れ心も乱れつゝ、剣を投げ捨て、戦ひ巡るを軍神銚にて差し通し斬り伏せ、さしもに猛き項羽を従へ大将に向かひ、汝を守りの神とならんと銚を高祖に与へつゝ、眷属を引き連れ雲に上り、光を放ち、天下を納むる弓矢の力。天下を納むる弓矢の力の、強き守りとなりにけり。

以上